



トランプ米大統領（左）との会談に臨む安倍首相＝11月6日、東京・元赤坂の迎賓館

相手次第の大盤振る舞い

安倍首相の本音



今秋来日したトランプ大統領との日米会談は、日本にとってどのような成果が上がったのだろうか。

日米間の緊密な安全保障体制を確認したということかもしれない。しかし、北朝鮮の軍事的な脅威を眼前にして、従来の安

保体制を変更するような選択肢をトランプ大統領が持ち出すはずもない。とすれば、誇示すべき成果は乏しい。

他方で米国側は大統領側近が関わる基金への拠出金はともかく、大規模な軍事装備品の購入約束を取り付けて満足すべき成果であったろう。大統領は韓国でも同様の商談をまとめているから、さしずめ兵器を売り歩く「死の商人」顔負けの敏腕ビジネスマンである。

そもそも国際情勢が緊迫化した原因の一端は、大統領が就任以来続けていた過激な発言にある。見事なマッチポンプぶりと言うこともできる。二つ返事で応諾した安倍晋三首相の太っ腹ぶりには、それ以上に驚かされた。「オトモ

ダチ」には甘い性格であることは指摘されてきた。大統領との個人的に親密な関係を強調する安倍首相が米国に対して甘くなることは予想されたことだろう。

しかし、軍事装備品購入には、防衛予算の裏付けが必要になる。購入予算については国際公約を錦の御旗にして、国会の審議権などに配慮する気配はない。

軍事装備品の購入は、後年度負担を伴うから数年間に及ぶ予算支出をあらかじめ決定してしまふことになる。防衛予算をやりにくくして購入費を捻出するつもりもないらしい。年末にかけての予算編成に向けて防衛費の規模は急激に右肩上がりになって歯止めがきかなくなっている。

この前後に政府が示した国内の諸問題に対する対応は「スイーツは別腹」という言葉を連想させる。アメリカをもてなすためのスイーツは金に糸目をつけない。一方で、選挙の公約であった教育の無償化の費用などにつ

いては、さまざまな理由を挙げて削減しようと試みている。本来は、そのいずれもが国民の税金が原資であり、一つの財布のはずなのだが、アメリカとの交際費は別会計と思っているようだ。

つまり、アメリカ・ファーストで大盤振る舞いをした安倍首相は、国民に対しては決して太っ腹ではない。さすがに国民の反発を懸念した与党内の声もあって、多少とも公約に近づける努力も重ねられている。とはいえ、明らかに不承不承の措置との印象を与えている。

そもそも財源の裏付けが不十分なまま、選挙向けの口先だけの約束だから、現実の政策枠組みに落とし込もうとすると、つじつまが合わなくなる。釣り上げた魚に餌はやらないといわんばかりの態度が、米国製のように身を固めたい首相の本音ではないのか。

（東京大名誉教授 武田 晴人）